

【分掌評価】

令和7年度 山形県立小国高等学校 学校評価書（自己評価・学校関係者評価）

校 訓	「自律・忍耐・向上」
マインテーマ	「挑め、ともに！」
学校教育目標	1 郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらよりよい地域づくりの主體的に関わる人材を育成する。 2 健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑む人材を育成する。 3 多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる人材を育成する。
学校経営方針	小規模高校のよさを生かし「生徒一人一人が輝き、笑顔と感動を地域と分かち合う学校」づくりを実現する。 *** 育成したい資質・能力 ***（学校教育目標の実現のために） 1 主体性 「自己理解・自己肯定感・学ぶ意欲・計画力・意思ある選択・創造的市民性」 2 挑戦心 「情報収集活用能力・課題設定力・共感力・思考力・創造力・行動力・やり抜く力・伝える力・振り返る力」 3 協働力 「受容力・対話力・共創力・持続可能性意識・グローバル意識」

達成度
A: 達成できた
B: ほぼ達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標	重点目標の達成度	重点取組	重点取組に対する具体的方策	重点取組の達成度(中間)	中間総括時点での重点取組の達成状況	重点取組の達成度(年度末)	重点取組の達成度(年度末)の評価の根拠・年度末に実現された生徒や学校の姿等
1 個別最適な学びと協働的な学びの推進	B	○本校の特色である「白い森未来探究学」や「教科等横断的な学習」、「国際教育」の実践・深化により、本校生に育みたい資質・能力を伸ばす。	○「白い森未来探究学」において、授業設計や振り返り等の授業のブラッシュアップを強め、全教員の共通認識と授業準備により、毎回の授業の充実度を高めている。 ○「教科等横断的な学習」において、プロジェクトチームのリーダーシップのもと教科横断授業の実践・深化を続け、育みたい資質・能力がどう伸びているのか、どう関係していくのかを測っていく。 ○国際教育の実践を推進する。	B	○「白い森未来探究学」のマイプロ活動において、ゼミ形式で進行することで、教員・生徒ともにより良い実践を目指し活動している。 ○「教科横断的な学習」を通して深く考え答えを導き出す授業づくりを検討中であるが、今年度前期の授業実践数では足踏み状態である。授業内容の改善で今後向上を図る。 ○「国際教育」は後期での活動が中心であり、今後実践を行っていく。	B	○各学年とも発表会に向けた準備、当日の堂々とした発表が見られ、「白い森未来探究学」の充実度が徐々に高まっている。 ○「教科横断的な学習」は実践数が減少しており、昨年度までの機運が低下してしまっ。令和9年度入学生からのカリキュラム化に向けて次年度は実践的に準備する必要がある。 ○放課後国際理解講座やAVV交流などで、活き活きとした生徒の姿が見られ、国際教育の効果が見られた。
		○AI学習システム活用を含め、ICTを活用した個に応じた指導、学習の個性化、協働的な学びの充実を図り、「確かな学力」を育む。	○スタディサブリを用いた効果的な学習の仕方の提案と習慣化を図る。 ○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業研究・実践を推進する。 ○1学年における「LEAFシステム」の操作習得と、活用機会の拡大を図る。	B	○LEAFシステムの使用法、スタディサブリの活用など教員の研修会の機会を設け、各教科や学年での活用を進めている。目立った実践例は少ないが、教員の取り組み状況の確認や共有を強化しさらに実践を進め、生徒の学びにつなげる。	B	○LEAFシステム」の活用法について国数英それぞれで研究し、生徒にとって効果的な所とそうでない所がわかり始め、教師にとっては生徒の理解度や取り組み状況の把握・分析ができ、次年度の活用に向けた土台となった。 ○「スタディサブリ」の利用は、四年生大学等希望者への到達度テストの年2回受験と、その前後の配信課題学習の取り組みが定着化している。
		○地域や企業・大学等と連携したキャリア教育や体験的教育活動の推進により、キャリア意識を醸成する。	○白い森学習支援センターと連携し、模試や講座への参加を推進し進路意識を高める。 ○外部の方との交流等の充実と、自ら外へ出て活動する機会の推進を図る。 ○学年と連携し、生徒及び保護者に進路情報等を提供する。	B	○白い森学習支援センターの学力サポートプロジェクトにより、新たに危険物取扱者講習を実施していただき、近年停滞していた資格取得の意欲向上につながっている。 ○各学年で生徒面談を多く行っており、キャリア意識の向上を図っている。	B	○今年度は小論文、英語検定、危険物取扱者の講習を計画した。特に危険物では5名が参加し、1名が受験した。合格はできなかったが、資格取得に向けた生徒の意欲が見られた。 ○1年生は、7月に外部講師として桑名暢氏によるキャリアガイダンスを実施した。9月には企業説明会に参加し、小国町にどんな企業があるかを知ることができた。2年生は、6月にインターンシップを行い、20名が1社で実際に働くことで自分の将来を考える良い機会となった。リクルートからお金に係る進学雑誌を取り寄せ、1学年では保護者との懇親会で、2学年では学年通信で情報を提供した。
		○個々の進路希望の実現のために、意欲的・計画的に学習に向かう態度を涵養する。	○シラバスを充実させ、年度当初は計画的な学習を見通していたが、半年を経過しシラバスの活用の度合いが薄れてきているため、再度教員生徒で確認し活用していく。 ○1年生全員と2年生の進路系で到達度テストを行った。今後は結果に連動した事後課題を活用し学習意欲につなげる。 ○放課後講習と面談により、四年制大学を希望することの意味の確認や、学習に向かう意識の向上を図っている。	B	○シラバスを充実させ、年度当初は計画的な学習を見通していたが、半年を経過しシラバスの活用の度合いが薄れてきているため、再度教員生徒で確認し活用していく。 ○1年生全員と2年生の進路系で到達度テストを行った。今後は結果に連動した事後課題を活用し学習意欲につなげる。 ○放課後講習と面談により、四年制大学を希望することの意味の確認や、学習に向かう意識の向上を図っている。	B	○到達度テストの運動課題を週1回のペースで数週間配信し、特に2年生進路系で毎回必ず取り組み生徒が数名の良い取り組み状況だった。 ○シラバスは今年度から大きく変更を行ったが、月が進むにつれて活用の度合いが薄れていった。年度途中の経過・振り返りが必要である。
		○図書館等の活用やNIE実践により高い教養と豊かな心を醸成する。	○朝学習や授業を通して本や新聞の活用を広げ、図書館の利用を推進する。 ○校内読書感想文コンクール、読書会等の読書活動推進のための取組を推進する。	B	○朝読書・読書会・読書感想文の取り組みや新聞学習により生徒の図書館利用の活性化を図り、読書活動や情報活用の推進を行っている。	B	○授業で図書館を使用する際は、生徒が活発に本を探し、活用する姿が見られた。1年生は読書をメインに朝学習を行い、落ち着いた状態で1時間目の授業に臨んだ。読書感想文コンクールでは地区で2名が入選し、県のコンクールに進んだ。
2 資質・一人一人の力を育てる生徒指導を推進し、社会的	B	○あいさつの励みや基本的な生活習慣の確立に向けた援助・助言により、自律した社会人としての基礎固めを行う。	○教職員から積極的に声かけ、あいさつの模範を示すとともに、授業や日常生活においては、相手に配慮した言葉遣いや態度を意図させる。 ○保健室入室時には、入室カードや問診を基に生活習慣について一緒に振り返り、改善点を見つけ、具体的な解決策を考え、行動できるよう支援する。 ○検査結果や入室状況を踏まえた保健指導を実施する。	C	○相手の立場に立つて考えることを促すため、日々のホームルームでの継続的な指導や必要に応じた個別面談を通して、生徒自身に考えてもらった。生徒の成長を感じる場面が増えたように思うが、まだ自分本位な言動が気になる生徒もいる。 ○昨年度に比べて、受診勧告書提出率・受診率が高い。生活習慣や身体症状を見直す機会となった。入室カード記入後、振り返りは実施できているが、行動変容まではできていない。	B	○あいさつ運動や日々の対話や学年での丁寧な面談等を重ねたおかげで、心理的バリアがなくなり、安心度が上がって元気なあいさつや他者を思いやる様子を目にする機会が増えた。特に、3年生は最上級学年として爽やかにいっつと学校行事や生徒会活動を率先垂範していた。 ○保健室入室時の来室カードへの記入については、睡眠時間や食事を丁寧に記載できる生徒が増えてきた。行動変容については個別の保健指導が必要である。 ○冬休み前に受診勧告書未提出者の面談を実施し、受診の必要性について保健指導を行った。検査結果や身体症状を見直す機会となった。
		○異なる立場や考え、価値観を理解し互いに活き活きと学校生活を送れるような取組を工夫して行い、自己及び他者を個性的な存在として尊重していく心を育てる。	○傾聴力を高める取組（ファンリテーション、ワークショップ、グループ討議等）を通して、相手の話を丁寧に聴く力を高め、自分の意見を大切にしながら相手の気持ちに配慮した伝え方（アサーティブコミュニケーション）を学び、相互理解を促す。 ○他校の生徒や地域の方々との交流を貴重な機会ととらえ、多様な世代や異なる背景を持つ相手との交流を深めることで、互いの個性を尊重し、支え合える関係を築く。 ○特別な支援が必要である生徒も含め、生徒の個の状況に応じた適切な支援ができるよう、職員研修の機会を設け、チーム体制を維持する。	B	○各種のグループワークを通して、様々な意見に触れる場や自分の意見を伝える経験ができたことで、相互理解に努める様子や達成感が伺えた。 ○小規模校サミットを通して、他校の生徒を気遣いながら交流する姿が見られ、他者を尊重する姿勢を養えた。 ○特別支援教育の職員研修（8/1実施）で、実際の生徒を題材に個別のケース会議を行い、生徒の実態把握に努め、困難さの背景を推測しながら必要な手立てを検討できたことで、チームの中で各々の困り感や生徒の様子を共有でき、組織的な対応の意義を再認識できた。	B	○数多くのワークショップや他校生徒との交流等を重ねた経験から、自分の意見を伝え、意見をまとめることに自信を持てるようになり、自分から積極的に関わりを持ち、協働する様子が見られた。今後、ファンリテーションの理解を深め、互いの意見を大事にし、協働学習をより一層取り入れていきたい。 ○特別支援教育の校内職員研修（8/1・10/2実施）を行い、ケース会議や互いの実践を共有する等、保健室を中心に研修内容を工夫し、生徒の実態把握や必要な手立てを検討でき、組織として特別支援教育の意義を確認できた。
		○学校行事やボランティア活動等への主体的な取り組みを奨励し、生徒一人一人の自己有用感を高める。	○生徒からのアイデアを積極的に取り入れた行事の企画・運営を推進し、生徒一人一人の得意や興味関心に合わせて役割を任せ、責任を持って取り組むことを促す。 ○ボランティアの活動内容や意義について丁寧に説明するとともに、地域と連携して生徒が参加しやすいボランティア活動の機会を増やす。	C	○クラスマッチやサミット等の学校行事において、生徒が主体的となり自分たちのやりたいことを明確にして活動し、責任をもってやり遂げた。仲間と協働して取り組むという点では課題が残る部分もあつた。 ○ボランティア活動について、窓口の教職員だけでなく、学年からも積極的に参加を促し、これまでボランティア活動に参加してこなかった生徒の参加機会をつくることできた。 ○参加の際、遅刻や欠席等の自己都合によるトラブルが目立ったため、改めて参加の意義やマナーについて丁寧に説明する必要がある。 ※春のオープンデー（5/11 9名）、新センター工事現場ヘルメット着（5/13～20 15名）、つむぐマルシ（6/7 17名）、御田稲穂祭（6/15）、まご家祭（7/5 5名）、「あいつ」夏祭り（8/21 9名）、二宮神社お祭り（8/18 2名）、小国町旗争奪大会（7/22 6名、8/2 5名）、小学生・中学生サイエンス講座（7/31）、クアーズテックSummit「親子工業界見学ボランティア（8/22 6名）」、「こもりの里」夏祭りボランティア（8/22 6名）	B	○学校行事を通して、生徒が主体的に取り組み、自分たちで創り上げることへの達成感を感じている様子が見られた。自身の役割にも積極的に取り組み、行事を終えることに小さな成功の積み重ねが自信につながっている様子が見られた。 ○ボランティア活動について、窓口の教職員だけでなく、学年からも積極的に参加を促し、これまでボランティア活動に参加してこなかった生徒も参加する姿が見られた。生徒へのお知らせを丁寧に、ボランティア活動の目的や意義を十分に理解し、期日や時間を守って活動する様子が増えた。 ※薬物乱用防止広報ボランティア（11/22 2名）、赤い羽根共同募金（保健委員会）、N高生との交流会（11/12 6名）
		○継続的にいじめ防止対策を徹底することで、いじめのない学校を目指す。	○学年を超えて交流する生徒会主催「いじめグループ討議」において、偏見・差別等をテーマにした身近な事例について生徒同士で対話を行うことで、相手の立場になって考え、多様性を尊重する心を育てる。 ○年2回のいじめ・学校生活アンケートも活用しながら、生徒の些細な変化や気になる言動について教職員間で情報共有を密に行う。	C	○いじめグループ討議で、一人一人がいじめについて考える機会を持ったが、ワーク時間が短いため、多様な意見や思考の深まりにつながっていない。 ○いじめアンケート1回を実施（6/27、いじめ1件）。アンケートをきっかけに気になることを正直に書いてくれたので、些細なことでも気軽に、面談につなげることができた。また、生徒の言動や様子について、学年会や生徒保健課会議等で定期的に情報共有を行い、チームで対応することができた。	B	○「いじめグループ討議（5/30）」では生徒会執行部が、より良い学校づくりや関係性づくりを考えた企画・運営し、一人一人がいじめについて考える機会となった。 ○年2回のアンケート（6/27実施：いじめ認知1件、11/27実施：いじめ認知1件）の機会を利用し、気になっていたことを正直に書いてくれる生徒が多く、個別面談、情報共有と迅速に対応することができた。特に、悩む学年団や保健室で打ち明けられることのできる生徒もおり、教職員間で情報共有を行うことができた。
		○社会とのつながりを生かし、地域との協力した放課後活動の充実・継続を行う。	○年2回課外活動調査を実施し、生徒のニーズを拾いあげ、地域と連携して新たな活動につなげるとともに、生徒が充実した放課後を過ごせるよう、適宜面談を行い、キャリアや将来の進路のために充実した過ごし方ができるよう支援する。	C	○課外活動調査を実施（4/10、9/16の2回）、生徒たちの放課後の過ごし方の把握に努め、有意義な時間の使い方ができているから、進路等ともからめて早い段階から面談し、適宜確認をした。やるべきことよりもやりたいことを優先し、優先順位をつけて行動できていない生徒や何もしていない生徒も多いため、継続的な支援が必要	B	○課外活動調査を実施（4/10、9/16の2回）。生徒たちの放課後の過ごし方の把握に努め、有意義な時間の使い方ができているから、進路等ともからめて早い段階から必要に応じて個別面談ができた。3年生や地域みらい留学生の地域サークルへの参加率が高く、社会とのつながりを持っていた。反面、大きな動きのない生徒もいるため、今後は教職員側も課外活動の充実を促し、生徒の主体性や社会性を高める機会を設けた。
3 される安心・安全かつ信頼	A	○「地域とともにある学校」としてのコミュニティ・スクール運営やPTA活動を実施し、学校・家庭・地域が一体となった活動を工夫して行う。	○朝のあいさつ運動の時間等を変更し、より多くの生徒と挨拶を交わせるようにする。 ○専門部の活動を計画的に行う。 ○さくら連絡網を活用してPTA活動の様子を会員に伝える。 ○各委員や地域とのより一層の連携を図り、学校運営協議会の熟識等による意見を教育活動に活かす。	B	○挨拶運動の時間を変更し、より多くの生徒に声掛けができるようになった。 ○計画的に実施できているが、今後より丁寧に活動を展開できるよう努める。 ○今後も活動の様子を伝えていく。 ○防災訓練時に、地域の理解を求めよう働きかけたりするなど、今後も連携を図っていく。	B	○朝の挨拶運動は生徒の登校実態に応じて活動時間を変更し、目的達成に効果があった。しかし、参加率は46%に留まった。次年度は、柔軟な参加が可能であることをさらに周知していく必要がある。 ○学校祭での芋煮振る舞いや花火大会巡視などを通して、生徒の活発な活動を支え健全育成に大きく寄与した。 ○PTA活動の様子をさくら連絡網等で伝えることでPTA活動の周知を図った。
		○特色ある教育活動や生徒の活躍の姿について発信方法を工夫し、学校の魅力を校外内に積極的に伝える。	○学校HPとSNSの在り方を検討し、より効果的な広報活動に努める。 OPTA会報「よこね」を発行し、PTA会員同士の情報共有を図る。 ○CNと連携して、アスモや中学校の掲示版をとおして本校生の取組を紹介する。	B	○学校HP・SNSともに、効果的な広報活動となっている。 OPTA会報については、今後発行予定。 ○CNのご尽力により、本校生の取り組みを紹介してもらっている。	A	○学校HPでは更新頻度を上げ、SNSでは写真をふんだんに掲載し、生徒の生き生きとした活動の様子を伝えている。「いね」の数が平均して10を越え、好評を得ている。また、アスモに写真掲示している本校生の写真への反応も多岐にわたる。高齢者への周知も図られている。
		○危機管理体制の維持及び施設設備の安全管理により事故防止に努める。	○防災訓練を年3回実施し、非常時の連絡体制・避難と人員確認・炊き出しなどについて総合的に学ぶことで、防災意識を高める。 ○危機管理マニュアルの改定を行い、教員が非常時の行動について理解する。 ○月1回の安全点検による改善箇所の把握・修繕により、安心・安全な環境作りを努める。 ○個人情報等の情報管理の徹底を図るとともに、情報モラル教育に努める。	B	○防災訓練は2回実施済み。10月末の訓練に向けて計画的に準備を進めている。 ○4月に危機管理マニュアルの改定を行い、職員に周知している。 ○安全点検も予定通り実施できおり、修繕にも繋がっている。 ○HP等における情報発信の際など、引き続き個人情報の管理に努める。	A	○全ての防災訓練で、生徒も職員も災害時の諸問題について臨場感をもって体験的に学んだ。また、生徒保健課の生徒委員会への指導により、防災の観点から委員会活動を見直すことで、生徒の防災意識が高まった。 ○全職員による丁寧な安全点検を通して、事務室・技能員が迅速に対応・修繕を図り、職員の安全管理意識が高まった。 ○年度途中ではあったが、緊急性が高い熊対策を危機管理マニュアルに追加し、生徒・職員にも注意を喚起したことによって、現実問題に対する学校全体の防災意識が高まった。
4 指導力向上、心身の健康維持	B	○授業アンケート・授業評価・生徒の学習成果等により、指導と評価の一体化を図り、指導力の向上につなげる。	○授業アンケート・授業評価・生徒の学習成果等により、指導と評価の一体化を図り、指導力の向上につなげる。 ○定期的「白い森研修」、特別支援教育研修、公開授業等を行うことで、資質の向上並びに職員の日課の一致を図る。 ○面談時だけでなく普段から研修に対する助言を行うとともに教育センター等の研修について声掛けを行う。	B	○各種アンケート結果や個々の生徒の様子等を共有し、授業改善及び個に応じた指導が行われている。 ○4月及び8月に「白い森研修」、8月に特別支援教育研修、9月に公開授業及び授業研究を実施し、併せて随時生徒の様子についての情報共有を行い、職員間で指導力の共有が進んでいる。校内研修及び校内業務を通して各教職員の力量向上が図られている。 ○日常的に研修情報を共有するとともに、各種校外業務等への参加を積極的に推奨することによって、教職員の視野の広がり及び知見の深まりが図られている。	B	○各種アンケート実施や、「白い森研修①～④」、特別支援教育研修①②、公開授業（9月）及び各種授業研究等とをとおして、随時生徒の様子についての情報共有を行い、外部との連携も図ることによって、各教職員の資質・能力が高まった。今後は各生徒の学びの伴走者として、学校としてどのような授業を行っているのかについての研究と各教職員の授業力量向上が図られる必要がある。 ○研修情報を共有するとともに、各種研修や校外業務等への参加を積極的に推奨することによって、各教職員の視野の広がりが及び知見の深まりが図られた。各教員の実践を共有する場面があればなお良か。
		○業務改善を図り、ライフワーク・バランスの向上に努める。	○業務の効率化・削減・統合・整理について随時見直しを図り、業務量の適正化を図る。 ○ICTの効果的な活用を促進する。	C	○各教職員の負担の平準化が図られるべき業務があり、今後、各課・学年からの実態に基づく意見も集約し、組織体制を整える。 ○Google Workspace及びGGの活用が定着している。	B	○Google WorkspaceやGGの活用が定着し、情報共有や業務の効率化が進み、教職員の負担が軽減され、授業準備や生徒対応に充てる時間が確保されている。ライフワーク・バランスへの意識も高まり、働きやすい職場環境づくりが進展している。 ○業務負担の平準化を図ることは各担当業務によって難しい面があるが、年間を見通した各自の業務量を見直し、多忙な時期以外は早めに帰ることで休暇取得などを推奨することによって、各個人のライフワーク・バランスを向上させることができた。
		○同僚性を高め、休暇が取得しやすい風通しのよい職場環境づくりを推進する。	○職員間のコミュニケーションの促進により、仕事の分業化(集中化を防ぐ)を図るとともに、相互にフォローし合える職場環境を作る。 ○定時退校や休暇取得をしやすい雰囲気を作る。	B	○業務分担についての調整及び外部機関との連携を行い、業務の効率化が図られている。 ○定時退校日の退勤や夏季休暇等の取得について、積極的な声掛けを実施している。	B	○教職員間のコミュニケーションが促進され、情報の共有・業務の分担・相互支援が促進された。 ○定時退校や休暇取得に対する理解と配慮が広がり、互いの働き方を尊重する職場の雰囲気も醸成されている。安心感がある風通しの良い職場が実現できている。
		○教職員一人一人が働き方改革に対する意識を持ち、実行する。	○勤務時間を確実に把握することで、職員それぞれにあった業務遂行に対する助言を行う。 ○職員が自分の勤務時間を認識できるように、出勤時間の日常的なe教養への入力を促す。 ○業務の効率化を図ることによって、生徒と向き合うためのより多くの時間の確保を促す。 ○年間における時間外在校等時間の月平均が45時間を超える教員数0人を目指す。	B	○個別指導や面談等の時間が増加し、生徒との関わりが深まっている。 ○定期的に勤務時間管理の重要性を周知し、時間外在校等時間の月平均が45時間を超える教員数は0人である。	B	○勤務時間の自己管理が定着し、教職員が業務時間の管理を意識して行動するようになった。生徒との関わりや教材研究に充てる時間を確保できている。 ○働き方改革が「自分ごと」として捉えられ、持続可能な働き方への意識が高まっている。時間外在校等時間の月平均が45時間を超える教員数は0人である。